



つどいの樹

第7号

～ 学ぶ会だより～

2022年3月1日発行



チェジュ

済州四・三平和公園

2008年に開園し多くの人々が訪れる済州四・三平和公園には、犠牲者の名前が刻まれた碑が並んでいる。しかし、犠牲者とは誰か、そしてこの事件の名称をめぐる意見が分かれている。冷戦が一人ひとりにどちらを支持するのか、厳しい選択を迫っているのである。

1948年4月3日、南朝鮮労働党済州島委員会チェジュドは米軍政下で武装蜂起をした。1954年9月まで続く武力衝突や鎮圧過程において島民の1割近く(約3万人)が国軍・警察とパルチザンの双方によって虐殺された。そして、反共体制下の韓国でいったん「暴徒」の烙印を押されると、家族を含めて最近まで日陰者扱いされてきた。この事件のときに日本などに多くの島民が逃れた。

それでも、民主化とともに「済州四・三事件真相究明および犠牲者名誉回復に関する特別法」(2000年)が制定され、2003年に盧武鉉大統領ノムヒョンが済州四・三事件について公式に謝罪した。

(写真・文:三橋 広夫)



予科練志願への熱気と逡巡

安井 俊夫（「学ぶ会」代表）

「愛知一中予科練総決起事件」は、朝日新聞に「愛知一中の壮挙」として報じられた（1943年7月6日）。この学校の15歳以上の生徒全員が海軍予科練習生に志願することを決し、総決起集会を開いたというのだ。当初応募者は少なく、愛知一中は急遽「時局講演会」で校長、配属将校が熱烈に呼びかけた。

「個人的な夢や人生に意味はない。すべてを大君と祖国のために」これを受けて生徒集会が開かれ、生徒たちも次々と叫んだ。「祖国が興廢の瀬戸際にあるとき、机に向ってはいられない。俺は勉強をやめて予科練へ行く」「アメリカの学徒も既にわが軍を悩ませている。神州学徒のわれわれが、賊徒ヤンキーの学徒に後れを取っていいのか」こうして「征く者は立て！」の大声が發せられ、生徒たちは一人残らず立ち上がり、全員志願の「壮挙」となった。

しかし航空兵の過酷を知る「父兄」は志願取り止めを説得。だが息子たちは「殉国」「愛国」など戦時社会の論理と情熱を固めている。父兄側はこれにはむげに逆らえない。だが「航空隊へ征くことも、この家の仕事をすることも、天皇陛下への忠節に変わりはない」などと、静かに何度も説く親たちに接して、「わかった」と志願を取り下げる状況も出てきた。ここでは、「天皇陛下への忠誠」を持ち出す親たちの心情のなかに、殉国・愛国に対抗できるものがあつたのだろうか。（事件の顛末は、江藤千秋『積乱雲の彼方に』法政大学出版局、1981年）。

風のいろ 予科練志願への熱気と逡巡	安井 俊夫・・・2
今・学校で・教室で コロナ下だからこそ、表現活動を	岩田彦太郎・・・3
交流の広場 「人間の歴史」を楽しく学んで！毎回新しい発見！！	川端 益恵・・・4
大学のキャンパスから 復帰50年の沖縄を考える	柴田 健・・・5
歴史の窓 ベトナム戦争の拡大期（1963年～65年）の「計算間違い」	古田 元夫・・・6
授業づくりの土おこし モノから学ぶ歴史	
⑤ドイツの混合農業とブルスト～一滴の血まで～	瀬戸口信一・・・7
ようこそ教科書の舞台裏へ アジア太平洋戦争への思い	
その4 日本軍占領下で実施した皇民化教育	高嶋 道・・・8
学びを深める	
第7回 日本がもし10人の村だったら一税を考える	菅間 正道・・・9
随想 連載⑦ 第五福竜丸は、核のない未来に向かって航海中です	黒田 貴子・・・10
読者の声	・・・11
学ぶ会からのお知らせ	・・・12

コロナ下だからこそ、表現活動を

岩田 彦太郎（埼玉県公立中学校教員）

コロナ下の学校で奪われた「やる気」

「授業中、トイレに行きたがる生徒が増えましたね」「なんか、いつも同じメンバーだけで固まって話してますよね」「これとって大きな問題はないけれど、なんだかどんよりした感じですよ」

2020年秋のある日の学年会議で交わされた言葉です。2019年4月に入学した生徒たちは、やる気いっぱい、元気いっぱい。様々な学校行事でたくさんの生徒が自ら役割を買って出て大活躍してきました。いよいよ2年生へ進級目前のところ、「全国一斉臨時休校」に見舞われます。長い「自粛」期間を経て6月に再開された学校生活は制限だらけ。行事もほとんどできません。気がつけば、あんなにやる気に満ちていた集団が、曇り空のような集団になってしまっていました。

再生は学びを表現し合うことから

なんとかしようと学年職員で知恵をしばり合い、たどり着いたのが、生徒が学んだことを自ら表現し合う活動でした。SDGsについての調べ学習を行い、学んだことをナレーション、アート、ダンスで表現し合う学年独自の発表会です。学年生徒全員が、代わる代わる体育館のステージに立ち、仲間に向かって発表します。毎日一緒に過ごしている仲間の前で発表。それでも、舞台袖で出番を待つある生徒の手は、緊張のあまり震えていました。そんなドキドキも、本当に久しぶり。仲間の発表に対して、お

互いを讃え合う大きな拍手の連続が、曇り空に差し込み始めた日差しのようにでした。

制限だらけの学校生活の中で、生徒がお互いの思いを伝え合ったり、考えを深め合ったりする機会がなくなっていました。同じ教室で学んでいても、なんとなく接近できず、仲間の輪は広がらず、自信のない集団をつくっていたのでしょうか。

平和学習からアートで表現

3年生に進級し、「戦争と平和を考える」をテーマとした学習に取り組みました。長崎で被爆された方をお招きしてお話を伺い、さらに戦争体験の聞き取り活動を行って、それを発表し合いました。集大成はアート表現です。「戦争と平和」をテーマに、一人ひとりが絵画やイラスト、立体作品などで学んだことを表現します。最後はやっぱり体育館での発表会。全員がステージ上で自分の作品について語ります。あるベテランの美術の先生は、生徒たちの作品を見て語ります。

「確かに技巧の点では未熟です。でも、思いはしっかりと出ている。一人ひとりが、戦争とは何かを自分自身の中に強く持って表現しているのが伝わってきます。」

いま、学校は、コロナ下であっても生徒の力を引き出すにはどうしたらよいか、その模索を続けています。その一つの鍵は、学んだことを仲間と表現し合う活動にあるようです。



学年発表会のようす

「人間の歴史」を楽しく学んで！ 毎回新しい発見!!

浦安歴史たんけん隊 川端 益恵

2016年2月から、学び舎中学歴史教科書で歴史を学びなおしたいと10名ほどの仲間とスタートした「歴史たんけん隊」は、今年で6年目に入ります。

当初、江戸時代後半から始めて現代で終わるはずでしたが、月1回のN先生の授業では毎回新しい発見があり、歴史を学ぶ面白さに引き込まれてしまいました。2年で現代が終わったとき、参加者の多数意見で、2018年4月に原始・古代から再スタートし、2021年12月では、第8章帝国主義の時代(10)独立マンセーまで学びました。

発足時から公民館の小会議室を利用してきましたが、緊急事態宣言下での利用禁止や、ワクチンの集団接種会場設置で使用ができなくなりました。新たな会場として、2014年度に閉校した小学校が、「浦安市まちづくり活動プラザ」として生まれ変わり、空き教室が多目的室として利用できるようになりました。室料も安く、白板(黒板)をスクリーンとしても利用でき、プロジェクター、マイクの貸出しも無料で、良い学びの場所の確保はできたのですが、コロナ禍での外出自粛など、参加者が少なくなっています。参加者の環境も様々な変化がありましたが、「人間の歴史」を学ぶ楽しさを知り、環境が変わっても「歴史たんけん隊」での学びと交流を楽しみに集まっています。

当初からの参加者Kさん、Hさんからの「歴史たんけん隊」への想いを紹介します。

仲間とともに学べる喜び(Kさん)

難しいのかしら、追い付いて行けるかしらと恐る恐る覗いた「歴史たんけん隊」でしたが、即入会しました。

講師の話を静かに聞きながらメモを取る。そんな講座を予想していたのに講師のN先生と参加者達が教科書や資料を共に読みあい、活発に意見を交し合いながら楽しげに歴史を学んでいる光景に魅せられました。教科書の内容も新鮮でした。時代の覇者にだけでなく普通の人々の暮らしにも視線を向けて丁寧に描き出す。まなざしの向け方で見える事柄がこんなにも違ってくると、目からウロコ。自分の先祖

達も時代の移り変わりの中を逞しく生きてきたと歴史を身近に感じます。

古来日本人は、竹の霊力を畏れて竹の在る場所を襲わなかったという話に、寺社や茶席で用いられる竹の結界には軽くて持ち運びに便利というだけでなく、古来からの精神性が引き継がれているのかとの発見でした。

木綿の生産により丈夫な帆布が生まれて海運が盛んになり全国に物流が広がった話に、旅した北前船の港が思われてワクワクしました。経験を積んでからの学びには若い頃とはまた違った感慨があります。幕末の百姓一揆での八右衛門の言葉「上御一人から下万民に至るまで、人はみな人であって、人という字に区別はない。もともと貴賤上下の差別は天下を治めるための政治の道具である」には感銘しました。

人生の難事続きに意気消沈していた時に出合った「歴史たんけん隊」は、私にとって心身が潤い、力が湧いて来るオアシスです。老いても尚仲間とともに学べる喜びに感謝です。

学んで力が湧いてくる(Hさん)

何をやっても長続きしない私が、5年以上も「歴史たんけん隊」に参加しているのは何故？

学ぶことの楽しさ、新しい発見、今まで疑問に思っていた問題を一つ一つ丁寧に調べ、単に一つの歴史に対する見方を押し付けるのではなく、自分たちがそれぞれの立場で一つの事実をどのように解釈しているのかを問い、答えは一つではないと感じさせてくださる先生の授業が楽しいからだと思います。歴史は偉大な人が作るものとばかり思っていました。名もなき多くの人たちによって作り上げられてきたのです。70年近く生きています私も、歴史の1ページを体験している一人なのだと思えてきます。



大学の キャンパス から

復帰 50 年の沖縄を考える

柴田 健

(和光大学、都留文科大学、
東京経済大学非常勤講師
／元高校教員)



ハンセン病療養所・愛楽園にて (2017 年)

沖縄との関わり

今年は沖縄の日本復帰から 50 年を迎えます。地理教員として 40 年あまり「沖縄戦と基地」を中心に沖縄学習を組み立ててきました。現在は大学の教職課程の学生とともに学んでいます。

講義では学び舎教科書「歴史への案内・歴史と出会う」、「荒れ狂う鉄の暴風」、「基地の中の沖縄」を随時資料として提示しています。「基地の中の沖縄」には 1921 年と 2017 年の嘉手納基地周辺地図が示されています。2つの地図からさまざまなことが読み取れます。嘉手納滑走路が海岸と直交していないのは低地部分を利用して作られたことがわかります。またある作家が、普天間基地周辺に住民が戦後定住したと指摘しましたが、ここはかつて普天間街道と集落があった中心地域だったのです。

学生たちは、古地図と現在の地図との対比から多くを学べたと語ります。彼らの多くは沖縄戦後史学習が不足しているので、講義では阿波根昌鴻、瀬長亀次郎、大田昌秀の3名を中心にして、戦後沖縄の出発点を考えています。

沖縄戦を検証する

1980 年代前半、沖縄戦の掘り起こしに立ち会えました。読谷村のチビチリガマにも入壕可能でした。神奈川県立高校の沖縄修学旅行のモデル作成や勤務校の下見で 100 回以上沖縄に足を運ぶとともに、平和ガイドに参加し、琉球大学で学ぶなどで 2 年間居住しました。ひめゆり平和祈念資料館、嘉数高台、新旧の沖縄平和祈念資料館、魂魄の塔などの変化を観察し続けました。

沖縄戦の検証は今なお続けられ、新たな発見もあります。激戦地・南部地区から遺骨を含む土砂を搬出し、辺野古埋め立てに利用する問題は、沖縄では「戦争」が継続していることの証明だと思います。

沖縄のいま

これまで地域振興の名の下に本島の自然海岸埋立が激しく、恩納村周辺は各ホテルのプライベートビーチが広がっています。県が力を入れている観光業は、航空、ホテルなど本土・外国資本に利益を吸い取られています。

沖縄には国土の 0.6% の地域に米軍専用基地の 70% が置かれています。宜野湾市の普天間基地を返還させる代わりに辺野古新基地を造るとのすり替えは、1950 年代の米軍の基地拡張案の復活でもありません。名護市東海岸の辺野古・大浦湾周辺は過疎化が進んでいますがリゾート地として最適な海岸です。キャンプシュワブという海兵隊（米軍は陸海空との 4 軍体制）基地になっています。辺野古新基地はその拡張なのです。

嘉手納という米軍のアジア最大級の基地がなければ、戦後の米軍のアジアでの戦争は不可能でした。朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争などです。日本復帰運動とベトナム反戦運動は、沖縄では一体のものとして取り組まれてきました。沖縄からグアム、ハワイに米軍基地が後退する計画があります。日米安保条約は再考するべきだと思いますが、当面、地位協定を他国並みに変更するとともに、沖縄の基地負担を減少させましょう。

9 年間大学で教えてきましたが、「学生沖縄の旅」を 4 回実施しました。参加は毎回 10 名弱ですが、4 日間で名護のハンセン病療養所／高江、辺野古、嘉数高台／南部戦跡は轟壕、ひめゆり平和祈念資料館、魂魄の塔、摩文仁で資料館、平和の礎と韓国人慰霊の塔／対馬丸記念館、不屈館というフルコースです。

この「学生沖縄の旅」が、学生とともに沖縄に学ぶことの集大成でしょうか。22 年 2 月の 5 回目がコロナで中止になったことが残念です。



ベトナム戦争の拡大期（1963年～65年）の「計算間違い」

古田 元夫（コアアドバイザー・日越大学学長）

多くの戦争で、その拡大には、戦争当事者の「計算間違い」が関わっています。ベトナム戦争（ベトナムでは1954年のベトナムの南北分断から75年の南ベトナムの親米政権の崩壊までを抗米救国戦争とよんでいる）でも、そのようなことが起きています。ここでは、ベトナム戦争が、米軍戦闘部隊の参戦する局地戦争にエスカレートしていった、1963年から65年までの時期を見てみましょう。

米国の「計算間違い」

この時期の米国側の「計算間違い」は、戦争当時から指摘されていました。南ベトナムのゴ・ディン・ジエム政権が独裁的傾向を強め、都市の仏教徒をはじめとする反政府運動が高まるのを見て、米国は南ベトナム軍部によるクーデタを黙認します。63年11月のクーデタでジエム政権が崩壊すると、米国の期待に反して南の政権は安定せず、米国側には、南の反乱の支援者である北をたたくことで、南の危機を救おうという案が浮上します。64年に起きたトンキン湾事件と、その後の北ベトナムへの爆撃は、こうした流れで発生しました。

ところが、北の指導部は、南を支援する意思を放棄するどころか、長年控えてきた北の正規軍の戦闘部隊の南下に踏み切ります。こうした状況の中で、ジョンソン政権は、南の親米政権を守るには、南政府軍に戦争をまかせるのではなく、米軍が参戦をしなければならぬと判断して、南ベトナムへの大量の米軍戦闘部隊の投入に踏み切りました。

ベトナム労働党の「計算間違い」

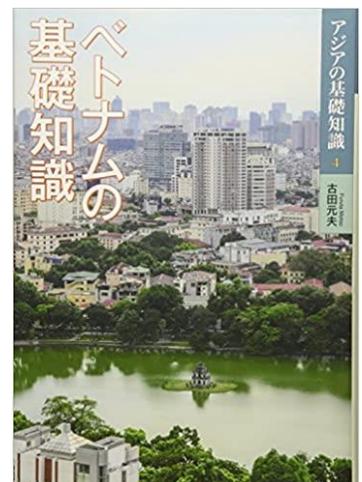
ベトナム戦争研究は、長い間、米国側の資料に依拠して行われてきましたが、21世紀に入ってベトナムでも資料公開が進み、ベトナムの米国との闘いを指導していたベトナム労働党のそれぞれの時期の判断も明らかになりつつあります。それによると、63年のジエム政権の崩壊直後の中央委員会で、労働党は、米軍の介入を招く可能性が高いとして、長年控えてきた、北の正規軍の戦闘部隊を、ラオス・カン

ボジアを迂回するホーチミン・ルート経由で、南に送ることを決めました。トンキン湾事件も、労働党の側は、米国の危機意識の現れで、それだけ南の親米政権の危機が深刻な証拠と判断し、南の解放戦線を北の正規軍が後援する形で、一挙に親米政権の崩壊を導くことを計画します。

では、こうした計画は、米軍の介入を招くとは考えられなかったのでしょうか。労働党は、世界的な覇権国家である米国は、一か所で泥沼にはまるようなことはしないと考えていました。南の親米政権を、どうしても維持できないとなれば、米軍による戦争の拡大に向かうのではなく、南の中立政権の樹立といった、米国の面子も立つような妥協で、南から手を引くだろうと考えていたわけです。そうであれば、解放戦線と北の正規軍で、南の親米政権の危機をいっそう深化させ、米国に南ベトナムをあきらめさせるのが得策ということになります。

この労働党の判断は、覇権国家米国の行動予測としては、それなりに合理的だったように思われますが、米国がこうした予測に反して、南への大量の米軍投入に踏み切ったのは、米国が南ベトナムにおいていた戦略的価値は、労働党の想定よりも高かったということになります。おそらく、インドネシアでの共産党の勢力拡大、カンボジアのシハヌーク政権の反米傾向の強化、マレーシア結成をめぐる混乱とシンガポールの分離独立、といった当時の東南アジア情勢が関わっており、米国は南ベトナムで「引く」わけにはいかなかったということになるのではないのでしょうか。

参考資料：古田元夫『ベトナムの基礎知識』（めこん、2017年）



モノから学ぶ歴史（子どもたちと学んだ世界地理の実践から）

⑤ドイツの混合農業とブルスト～一滴の血まで～

瀬戸口 信一（元公立中学校教員）



産業革命後、農業人口減少による穀物輸入で大打撃を受けた農民たちは農業を進化させ、農耕と牧畜を合わせた混合農業を生み出した。弁当のおかずやホットドッグで子どもたちにもお馴染みのソーセージ（ブルスト）を教材に混合農業を学ばせたい。

◆「ブルスト」って何？

まずは、子どもたちにこれ何だろう？と本物の羊と豚の腸を見せ触らせたい。「気持ち悪い」「ゴムみたい」「ビニールかな？」などと大騒ぎとなる。そこで、ウィンナーとフランクフルトを見せる。「ソーセージの皮だ」。

ではその皮は何からできているかな？いろいろと予想させたところで、羊の解体作業の写真を見せる。「腸かな？」そうだウィンナーは羊の腸、フランクフルトは豚の腸で包んである。では包んであるその中身は何だろう？「肉」「挽肉」ここで、ドイツの肉屋のブルスト売り場の写真を見せる。



するとそこには、たくさんの種類のブルストが並んでいる。実は、ドイツには1500種類以上のブルストがあるそうだ。中身も皮も実にいろいろだ。

◆一滴の血まで…

すると、子どもたちは「1500種類のブルストは、何が違うの？」と疑問を持つ。そこでDVD『人間は何を食べてきたか？一滴の血も生かす～肉～』でブルスト作りの一部始終を視聴させる。農家の庭先で鮮やかに解体されるブタ。それをじっと見つめる農家の娘。子どもたちはその娘の表情に釘付けになる。命を食べる事で自分たちの命が成り立つという事実に子どもたちも衝撃を受ける。

また、肉屋の手際よい作業で一匹の豚が解体されブルストに加工される過程（内臓や肉をミンチにする→塩と香辛料を混ぜる→腸や胃や膀胱にそのミンチを入れる→茹でる）に見入る。蹄と毛以外の肉片からいろいろな臓物そして最後の一滴の血まで余すところなく使って作られるのがブルストなのだ。



◆なぜ、ブルストを作るのか？

人間は雑食動物だ。住んでいる地域の気候・風土により、肉食中心か穀物中心かに分かれる。ドイツの緯度は北緯 48 度で北海道の北端より北だ。だから冬は作物が育たない。冬は午後 3 時頃になると日が沈み、日照時間も短い。こうした厳しい気候や風土の中で、どうやって食料を獲得するのだろうか？「家畜だ」。

では冬の間、羊や豚の餌は？「ない！」ではどうする？ここで、子どもの頭の中でブルストとドイツの農業がやっと繋がった。家畜のえさがなくなる前の秋に…「豚を殺して肉を保存」。豚肉そのままだと？「腐る」そこで「ブルストにして保存食にするんだ」。なぜ保存できるの？「茹でて殺菌」「香辛料と塩で殺菌」「腸に包んで腐らせない」などとブルストの保存食としての特色が次々とあがる。このようにして、ヨーロッパ人は、保存食としてブルストやハムを作ってきたんだね。

◆混合農業とは？

ヨーロッパでは、厳しい冬を生き延びるために肉食文化を育て、農耕と牧畜を融合した混合農業を作りあげた。休耕地では家畜が放牧されて、その排泄物が肥料になり、土地を回復させる。輪作によって、病害虫を予防するなど、混合農業にはヨーロッパの農民たちの知恵が詰まっているね。



アジア太平洋戦争への思い その4 日本軍占領下で実施した皇民化教育 高嶋 道 (元中学高校教員)

突然「君が代」を聞いて

2009年8月、マレーシアのペラ州の州都イポー市郊外を訪ねました。劉道南さん(元教師・新聞記者)のご案内で、日本軍の住民虐殺の現地調査後、レストランに招かれました。10人の地元の方が待ち受けて下さって、重い気持ちが和みました。自己紹介の順番がきた王家崑さん(78歳)は、直立不動で「キミガヨハー、チヨニ…」と歌い始めたのです。

私は、たじろぎ、頭を垂れて、身を小さく固めて聞き入りました。日本軍の侵略の跡を訪ねて30年余、初めての経験でした。歌詞もメロディーも正確です。当時11歳の小学生だった王家崑さん。毎朝「ヒノマル」を掲揚し、皇居(東京)に向かって敬礼し、「キミガヨ」を歌わされていたのです。辛く悲しく悔しい気持ちが伝わってきました。歌が終わった後に、私は漸く顔をあげて、彼の目を見つめ、黙礼しました。彼は頷き微笑みながら握手を求めました。胸が熱くなり手を取り合いました。この間ひとことも交わさなかったのですが、双方の思いは通じあえたと感じました。劉道南さんから、私たちの聞き取りの目的は、調査と追悼のためだということが事前に伝えられ、理解されていたからでしょう。

校長先生は日本軍に拘束された

王家崑さんの証言です。「1942年3月26日の朝、サラ・ウタラに日本軍が来て校長・教頭・教務主任そして入れ墨をした住民など15名を拘束しました。殷春初校長先生(42歳)は、タイピンの刑務所に連行され、拷問で亡くなりました。一人だけ脱走に成功し池に飛び込んで助かりました。13名は3日後の29日の深夜、駅付近で銃剣で殺されました。その呻き声や泣き叫ぶ声が聞こえてきて、私は朝まで眠れませんでした。夜が明けて、友だちと恐る恐る見に行きました。側溝で血に染まって死んでいる人たちを見て体が震えて逃げ帰りました」「銃で撃てば、すぐに息が絶えるのに、銃剣で刺し殺したのは、住民に恐怖を植えつけるためでした」(注:この処刑法は、銃弾の節約にもなるので、各地で実施されています。



高嶋。「戦後1946年にやっとお墓をつくり、毎年清明節に興華小学校の生徒とともに、追悼をしています」。

私たちは14人のお名前が刻まれた「殉難華僑烈君之墓」にお参りしました。訪れた小学校の教室には、犠牲になった先生方の遺影が飾ってありました。日本軍政下の悲劇は子どもたちに語られ伝えられているのです。当時の日本軍は、教員や医者などの知識人を抗日派の華僑として敵視し殺害する方針で、この事件もそうした痛ましい事件のひとつです。

皇民化教育がめざしたものは

日本軍は東南アジアを占領し、支配下の諸民族に皇民化を強制しました。学校教育では、日本語の習得、日の丸掲揚、君が代斉唱などを徹底させ、天皇の臣民化をめざしました。

国内で1942年に発行された国定教科書『初等科国語三』に「台湾の『君が代少年』」が記載されています。1935年の台湾大地震の時、瀕死の重症の詹徳坤(12歳)が「君が代」を歌いながら亡くなったという「美談」です。また、シンガポールの旧フォード工場戦争博物館の展示には、出生届けの日付が「15th. April. 2604」とありました。2604とは日本の皇紀2604年のことで、神武天皇即位に基づいた実在しない神話上の暦です。赤子の誕生を1944年と記すことを許さなかった日本軍でした。

皇民化教育は、アジアを天皇をあがめる大帝国にする願望で、取り返しのつかない犠牲を強いました。その幻想は崩壊しましたが、他民族の言語や文化を尊敬しない差別的な民族観は、今の日本にも根強く残っているのではないのでしょうか。



子ども・若者を主権者／市民に育てよう―「知憲」「学憲」のススメ

第7回 日本がもし10人の村だったら―税を考える

菅間 正道 (自由の森学園高校校長)

『世界がもし100人の村だったら』

公民連載と銘打ちながら、経済分野にまったく触れないのは忍びない。

今回は、経済分野の一場面でもあり、政治と密接にかかわる税についての学習を紹介したい。税金についての学習も、ともすれば説明過多に陥る。むしろ、必要な説明はおこなわねばならないが、どこで思考・判断をさせるかが思案のしどころ／授業づくりの腕のみせどころである。

約20年前、『世界がもし100人の村だったら』という本が流行った。細かな批判もあったが、ともかく「地球／世界を100人の村で考えてみる」という一種の思考実験かつ挑戦の書であり、インパクトは十分であった。

日本がもし10人の村だったら

私は、その100人村のアイデアを税金学習に援用してみた。題して「日本がもし10人の村だったら」。税の公平・公正な集め方はどうあるべきか、という問いを通じて、「税とは何か」、「公正・公平とは何か」の理解を深めたいと考えた。

メインの問いはこうである。「課税方式1から3のなかで、一番公正・公平なのはどれか。なければ、

課税方式4を考えよ」。最初から「所得税」とか「消費税」とか「法人税」と説明するのではなく、日本が10人の村だったらと仮定したうえで、どういう徴税方法が最善かを考える問いである（SRは、スーパーリッチ、Aはアベレージ、SPは、スーパープアの意である）。

大人の読者諸賢はひとめでわかるだろうが、1が人頭税、2が消費税、3が所得税である。生徒に議論をしかけてみると、これが意外に意見が分かれるのである。徴税をめぐる考え方についても、たとえば「累進性」とか「逆進性」という言葉・概念が先に来てしまうと、その説明を暗記することで精いっぱいである。が、他の税制との比較・連関・対比のなかでとらえると、理解もしやすくなるはずだ。これらの基礎的理解抜きに「応能負担」「応益負担」などと教えられてもチンプンカンプンであろう。

所得税の最高税率をどこまで

もう一つの問いが「所得税の最高税率をどこまで上げる／下げるべきか」である。現行の40%を紹介した後、日本の今昔や世界のあれこれの例を紹介する。トマ・ピケティが喝破したように、所得税率はどんどん下がって、法人税もあいまって「底辺への

競争」をくり返している。井上ひさしは、「政治とは税の集め方と使い道を決めること」と言った。

憲法84条には「あらたに課税を課し、又は租税を変更するには、法律によることを必要とする(租税法主義)」とある。税の学習はまさに政治の学習なのである。

	収入	課税方式 1	課税方式 2	課税方式 3	税率	課税方式 4
SR 1	1,500,000,000	200,000	150,000,000	600,000,000	40%	
R 2	100,000,000	200,000	10,000,000	40,000,000	40%	
A 3	6,000,000	200,000	600,000	1,800,000	30%	
A 4	5,000,000	200,000	500,000	1,500,000	30%	
A 5	4,000,000	200,000	400,000	1,200,000	30%	
A 6	4,000,000	200,000	400,000	1,200,000	30%	
A 7	4,000,000	200,000	400,000	1,200,000	30%	
P 8	2,000,000	200,000	200,000	400,000	20%	
P 9	2,000,000	200,000	200,000	400,000	20%	
SP 10	1,500,000	200,000	150,000	1,500,000	10%	
考え方		全員同額(20万)	全員同率(10%)	収入に応じて	段階的に変える	

連載⑦ 第五福竜丸は、核のない未来に向かって航海中です

黒田 貴子（中学校講師）

昨年3月20日、友人と第五福竜丸展示館を訪ねました。『ともに学ぶ人間の歴史ブックレット No. 9』の取材のためでした。都内見学などで何度も生徒たちと訪ねた懐かしい展示館です。

友人に、元乗組員の大石又七さんがどんなに強く優しい方だったかを一生懸命話していた時、大石さんはすでにこの世を去られていたのです（大石さんは3月7日に亡くなり、そのことが公表されたのは、21日のことでした）。大きな悲しみの中から、ブックレットは大石さんのことを軸にして書こうと決めました。

第五福竜丸事件の不条理

1954年3月1日午前6時45分、第五福竜丸に黄色い光が差し込みました。海底から突き上げてくるような轟音。みぞれまじりの白い粉が降り続け、乗組員たちは頭痛、吐き気、めまいなどに苦しむ、まもなく髪が抜け始めます。2週間後、焼津に着いた大石さんたちは急性放射能症と診断され入院。9月23日に久保山愛吉さんが亡くなります。医師団は、死因は放射線被ばくによると発表しましたが、アメリカは水爆実験との関係を認めませんでした。

第五福竜丸の乗組員にはアメリカからお金が支払われました。これは「賠償金」ではなく「見舞金」であり、この先何が起きても一切補償はしないと日米の政府間で確認されました。第五福竜丸以外の船も被ばくし、積んできたマグロは大量に廃棄されましたが、数多くの被災船の調査は打ち切られています。

30年後、高知県の幡多ゼミナールの高校生たちによって、1423隻もの漁船の被災があきらかにされました。

大石さんが語り始めた

大石さんは焼津を離れ東京に出て、事件のことは忘れようとしていました。その大石さんに和光中学校の生徒たちからお話を伺いたいと電話がありまし

た。しゅしゅ展示館に行き、6人の生徒たちを案内した大石さんは、その中の目の見えない少女のことが気に掛かります。あの子は福竜丸の様子が分かっただろうかと考えた大石さんは、模型船を作って和光中を訪ね歓迎されます。

この頃から大石さんは、自分が語らなければ第五福竜丸事件は忘れられてしまう、働き盛りで肝臓癌などで次々と亡くなっていった仲間たちのためにも、と語りはじめ、実に700回以上もの講演をされました。

大石さんは、核実験場にされ、豊かだった島の生活と健康・いのちを奪われたマーシャル諸島の人たちと交流します。凧を持って行ってマーシャルの子どもたちに凧揚げを教え、模型船を贈り、事件当時の村長のジョン・アイジャインさんと語り合いました。

昨年の3・1ビキニデーに、大石さんは「第五福竜丸事件は、遠い過去に終わったことではなく、未来の命に関わるんです。忘れてはいけない事件なのです」というメッセージを送りました。この事件は、核兵器禁止条約にも繋がっています。展示館の学芸員で、大石さんに寄り添ってこられた市田真理さんは大石さんの言葉を伝え続け、お話し最後にこう仰います。「第五福竜丸は、核のない未来に向かって航海中です」。





読者の声

会報第6号の「大学のキャンパスから」で紹介された齋藤一晴さんは、学び舎教科書を使った授業後、学生からその特徴について意見や感想を受け取りました。ご了解を得ましたので、その一部を紹介します。

- 学び舎教科書は、絵に対しての説明が少なく書かれており、生徒たちが絵を見て発見し、考える授業が展開しやすい教材となっている。また、学び舎教科書は太文字がないため、著作者の考えたキーワードではなく、生徒自らがキーワードを考えて授業にのぞめるため、生徒一人ひとりに合った教科書へと変えることができる。また、太文字がない分、ストーリーとして学習をとらえることができるため、単語を覚えるだけの「詰め込み型」になりにくいという特徴がある。
- 学び舎教科書を活用した授業では、生徒にとってなじみの薄いイスラム教に焦点を当てて、海を介した他地域とのつながりを考えさせることが可能である。その上で、こうした交流により発展したイスラムの文化の多様性を考える活動を取り入れたい。学び舎教科書の記述や図を活用した授業を充実させるために、この資料にあるような医学や数学などのあらゆる分野におけるイスラムの文化を考えさせたい。そして、この資料では多様な分野におけるイスラムの文化や技術が今日の生活にも関わっていることが示されている。
- 「学び舎」教科書の特徴として、ジェンダーなどに配慮をし「女性が輝いている」点に着目しながら教科書を作っている。本時の内容で有れば、「清少納言・紫式部」などといった人物は普通の教科書であれば、非常に簡単に説明が行われ深く触れられないが、「学び舎」教科書では、「女性が輝いている」ところに着目をしているために、しっかりと1ページ使用して、「清少納言・紫式部」などといった女性人物を取り上げながら教科書が作られている。また、今回の単元だけではなく、そのほかのページにおいても「女性」の活躍に着目して教科書を作成している。
- 既存の教科書では、日本の高度経済成長の過程から東京オリンピック、国民の生活の豊かさから公害へと移り変わっているが、学び舎教科書の場合は東京オリンピックの不参加国からベトナム戦争を中心に東西冷戦へと移り変わっている。私がここで一番注目したのは、学び舎教科書は「日本の繁栄」を象徴する出来事を取り上げているのではなく、日本の出来事から「当時の世界情勢」を結び付けていることで、歴史の流れを理解することができ、日本の歴史・世界の歴史を分けずに覚えることができる。
- オリンピックについてテレビの放送も多いため様々なところから情報を集め授業内容に繋げることができる。生徒にとっても今の状況はこの学習の学びの機会として最も良いときだといえる。学び舎教科書の特徴は生徒の気づき、引っ掛かりをどうつくるか、というところにあると私は考える。黒文字で書いてあるところもなく教師の自主性が高いものである。しかし、その分、教科書であれ、授業であれ、生徒へのそれをどのように行うのかというところで教師としての力量、腕がより一層問われる。このことを踏まえ、私が考える授業は討論を重視するところだ。これは学び舎教科書の特徴である自由性の高さを活かしてこそできる授業であると私は考える。生徒の気づき、引っ掛かりをどうつくるか、教師の発問に対してここで生徒同士の意見を討論することでより学びを深めさせたいと考える。
- 学び舎教科書の特徴として、歴史の学習において当時の人間ではなく、動植物に着目している箇所が見受けられる。今回の授業テーマも象から戦後直後の教育と平和について学ぶということで、動物の象に関する話から過去の歴史を学び、平和について考えていくことができる。このように歴史の学習において当時の人間以外に視点を合わせ、着目するという学び舎教科書の特徴を活かした。私自身がこのテーマに興味を持ったことも理由として挙げられる。終戦後の教育についての単元の授業の中で象が出てきたことは私の経験では今まで一度もなかった。しかし、学び舎教科書では象をメインに取り上げており、そこに面白さを感じた。生徒も興味・関心を惹きやすい内容であり、平和について新しい視点から考えられる点も選択した理由の一つである。



◆会員を 1000 人に拡大するためにご協力ください。

クラウドファンディングを通じて、多くの方々に学び舎教科書のことを知っていただくことができました。会員になってくださる方も増えています。ご友人やお知りあいの方に「学ぶ会」を紹介し、お誘いしていただくときのパンフレットを用意しています。ご活用ください。「学ぶ会」事務局までご連絡いただければ、お送りします。

■メールマガジンを読んでみませんか。

「学ぶ会」では、年3回「ともに学ぶ」と題したメールマガジンを配信しております。さらに良い教科書を編集したいと考えて作成しています。授業実践レポートや研究者の論考など、この会報の記事よりもかなり長文のものです。目的に賛同していただける方でメールアドレスを登録していただいた方のみ配信しています。申し込みは「学ぶ会」事務局まで。

◆学ぶ会のホームページから博物館・資料館を訪ねる。

コロナ禍の第6波が押し寄せ、家に閉じこもる生活を余儀なくされています。ラジオ・テレビ・インターネットなどを利用する時間が増えているのではないのでしょうか。学ぶ会のホームページには、日本と世界各地のさまざまな博物館・資料館へのリンク集があります。バーチャル・ツアーによって、ラスコーの洞窟の中を奥へと進んだり、大英博物館の館内をくまなく歩いてまわったりすることもできます。ぜひ一度のぞいてみてください。

●授業ブックレット第11号を3月に発売します。

第1号からのバックナンバーも販売しています。ご注文は「学び舎」まで。

「ともに学ぶ人間の歴史」授業ブックレット No.11

●アジアの海をつなぐ琉球王国 ●松井秀明

夜光貝、1貫文の銅銭などの実物を通して、琉球王国の交易を知る。



●足尾鉍毒事件をどのように広げるか—戦後の足尾鉍毒事件— ●小貫広行

足尾鉍毒事件は田中正造で終わったのではない。渡良瀬川流域の農民の闘いは戦後も続く。

●平和の礎であの人に会う ●高橋民子

戦争・平和学習を他人ごとで終わらせず、生徒たちを当事者として向き合わせたい。

●終わらぬ戦後—中国残留日本人と孫・ひ孫たち— ●飯島春光

「満州」から帰国した残留日本人の体験を聞き取ることができる最後のチャンス。そこで聞いた話を伝えた社会科の授業は、生徒たちの心を動かした。

A5判 700 円+税
ご注文は学び舎へ



一般社団法人 子どもと学ぶ歴史教科書の会（略称「学ぶ会」）
事務所住所 〒190-0022 東京都立川市錦町3-1-3-605
メールアドレス manabukai@mbm.nifty.com
ホームページ <http://www.manabisha.com>
編集・発行 一般社団法人「学ぶ会」会報『つどいの樹』編集委員会